

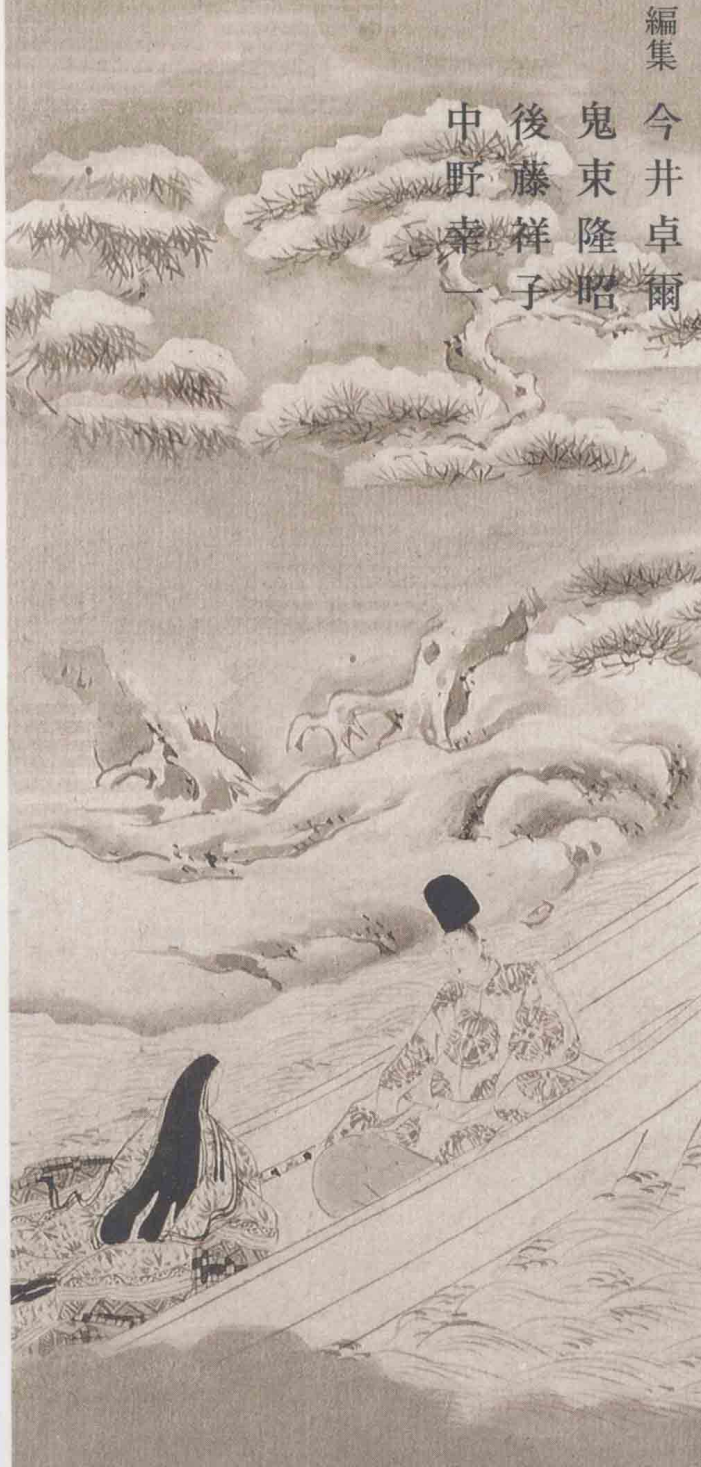
編集

今井卓爾

鬼束隆昭

後藤祥子

中野幸一



京と宇治の物語 物語作家の世界

源氏物語講座 4

源氏物語講座 4

編集委員

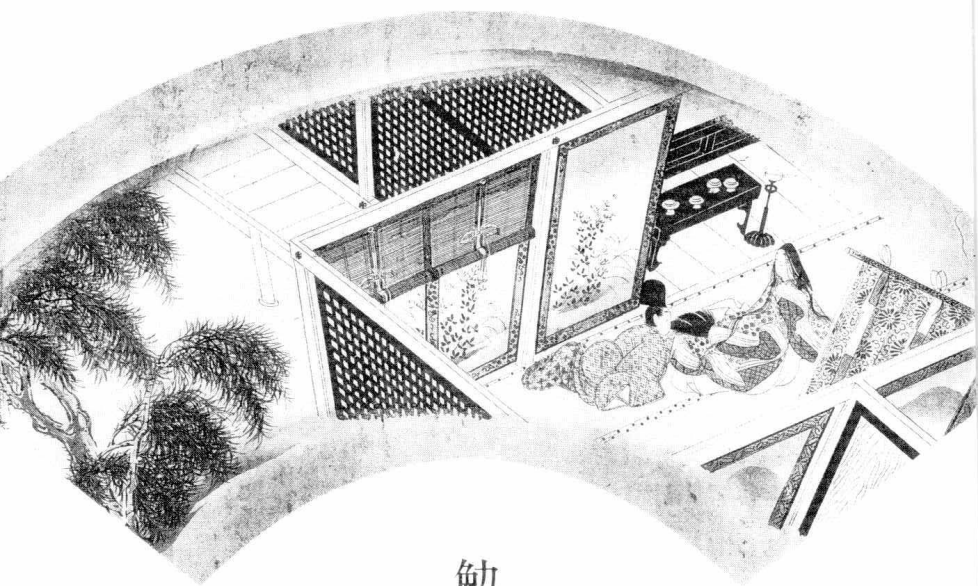
今井卓爾

鬼束隆昭

後藤祥子

中野幸一

と宇治の物語
語作家の世界



勉強社

源氏物語講座 第四卷

京と宇治の物語
物語作家の世界

編集 今井卓爾

鬼束隆昭

後藤祥子

中野幸一

発行者 池嶋洋次

発行所 (株) 勉誠社

152 東京都目黒区鷹番三―六―三

電話 (〇三) 三七九一―一五三〇

初版発行 平成四年七月二十五日

印字 大洋印刷

印刷 大洋印刷

製本 エイワ

ISBN4-585-02015-2 C3093 P3200E
定価3,200円 (本体3,107円)

刊行のことば

日本の多くの文学作品の中で、『源氏物語』ほど長く広く読まれつづけられているものはない。文芸、美術、音楽、演劇など多方面の分野にも深くかかわりをもっているばかりではなく、海外にまで喧伝され、評価されていることは稀有のことである。近時、特にこの物語への関心が高まり、過去の研究をふまえ、現在の視点からの検討の領域が広まり、深く掘りさげられている。時代や個人にはそれぞれの読みがあり、これらの読みを承知することによって、自己の読みを位置づけることができる。『源氏物語』に関するあらゆる情報を容易に入手することができるようになることは、時代の要請であり、それに応えることはなされなければならないこともある。いまここに、昭和までのものを総括し、平成への出発となるような、この物語への思考成果を披露しようとするものである。『源氏物語』への質問問いかけに答え、悲喜交々の人物像を点描し、物語作者としての紫式部を紹介し、あわせて時代環境を示し、優美の世界に誘い、さらには表現技法の細部にまでふれなければ、この物語の真骨頂に迫ることはできない。『源氏物語』本文の読解は言うまでもなく、古今東西にわたる享受の実態にも関心が及び、参考文献の整備も求められるようになるであろう。本講座においては、こうしたあらゆる要望をみたすために、それぞれの専門分野の熟達、中堅、新進の方がたのご協力を仰ぎ、ご執筆をお願いしたところ、ご快諾を得ることができたのは欣快の至りである。これによって、『源氏物語』研究の方にも、古典文学愛好の方にも、その研究、鑑賞の基盤作りができ、将来への飛躍的

展望が開かれるのに役立つならば、企画、編集、出版の喜び、これに過ぎるものはない。

平成二年十一月

編集委員

今井 卓爾

鬼束 隆昭

後藤 祥子

中野 幸一

目 次

京と宇治の物語

正篇から続篇へ

匂と薫——匂宮・紅梅・竹河巻——

宇治の世界——橋姫巻——

弁の尼の秘密——橋姫巻——

薫の道心と大君——橋姫・椎本巻——

大君——俗聖の姫宮——

宇治を離れる中君——早蕨・宿木巻——

東育ちの姫君——「あづま」から「みやこ」へ——

常陸介と中将の君——東屋と以後の巻々——

石田 穰二

11

神野藤 昭夫

23

中嶋 朋恵

34

待井 新一

48

今西 祐一郎

62

安藤 亨子

74

吉井 美弥子

86

松田 豊子

97

後藤 祥子

109

いろごのみの皇子——東屋と以後の巻々——

仁平道明

120

女房と従者たち——浮舟巻——

野村倫子

133

形代の女君——浮舟・蜻蛉巻——

北川真理

145

宮廷社会の薫——宿木・蜻蛉の巻——

田村俊介

157

女一の宮物語のゆくえ——蜻蛉巻——

原陽子

169

浮舟の出家——手習巻——

小林正明

180

横河の僧都と小野の人々——手習巻——

鷲山茂雄

191

夢のわたりの浮き橋——夢浮橋巻——

小町谷照彦

204

物語作家の世界

物語作家としての紫式部

南波浩

219

紫式部伝(一)——家系と生い立ち——	増淵 勝一	235
紫式部伝(二)——宮仕えとそれ以後——	加納 重文	248
物語創作における視座	呉羽 長	261
紫式部集と源氏物語	山本 利達	275
藤原道長と紫式部	福家 俊幸	287
公卿日記と道長文化圏	池田 尚隆	299
道長女彰子中宮方サロン	酒井 みさを	312
一条朝の才媛たち	下玉利百合子	324
紫式部日記と源氏物語——仮構される読者——	久保 朝孝	337
紫式部の女房批評	木村 正中	350

京と宇治の物語・物語作家の世界

京と宇治の物語

正篇から続篇へ

石 田 穰 二

一 書き継ぎによる長篇

『源氏物語』は卷々が書き継がれることによって、結果として長篇になった。当初から長篇的な構想のもとに書きはじめられたことは、桐壺の卷の高麗人^{こまうど}の相人の予言や、澤標^{みおつし}の卷の宿曜の予言によって明らかであるが、形としては、執筆の最小単位である卷々の書き継ぎによる。そして、これも結果として見ると、幾つかの卷々のつながりが、この長篇の物語のそれぞれ一つの部分を形づくっていると見ることができる。桐壺から藤裏葉までの三三帖について見ると、桐壺く花宴（八帖）が第一の部分、これはいわば光源氏の青春前期、葵く明石（五帖）が第二の部分、いわば青春後期、澤標く少女（八帖）が第三の部分、いわば壮年前期、玉鬘く藤裏葉（一二帖）が第四の部分、いわば壮年後期である。もっとも玉鬘は、年立上、少女の第三年と重なるから、この卷を少女につけるか、初音以降につけるかは、見方によって変るであらう。玉鬘という卷は、比較的独立性の強い卷と見ることができ

る。若菜以降では、夕霧の巻、宇治十帖では宿木の巻がそうである。これら三つの巻はそれぞれその存在の意味は違うが、組織的に見て例外的な巻と言うことができる。

二 二部構造と三部構造と

『源氏物語』全体を、ここでも結果として、構造的に見ると、まず、本稿のように、全体を正篇と続篇とに分かつ、いわば二部構造と見る見方が成り立つ。いわゆる正篇、桐壺から幻までの四一帖は、光源氏の一代記である。匂兵部卿（匂宮）から夢浮橋までは、薫を主人公とするが、ただこの場合は薫の半生記ですらなく、年齢的に見ても、光源氏の青春時代に当る。

正篇・続篇という二部構造と見る見方に対して、現在むしろ一般的に行われている（と少くとも筆者には思われる）見方として、全体を第一部・第二部・第三部に区分する三部構造の見方がある。第一部は先に言及した桐壺・藤裏葉の三三帖、第二部は光源氏の晩年を枠組みとする若菜上・下・幻の八帖、第三部は匂兵部卿・紅梅・竹河をいわばつなぎとして橋姫・夢浮橋の宇治十帖を本体とする一三帖である。

二部構造と見る見方は、言うまでもなく主人公の交替を軸にした考え方で、『源氏物語』は、光源氏とその表向きの子である薫二代にわたる物語ということになる。

三部構造と見る見方で、第一部と第二部を通じて主人公は一貫して光源氏であるにもかかわらず、どうしてこれを第一部と第二部に分かつのかと言えば、この間に、研究者の多くが、作風の変化を認めているからに他ならない。第三部を分かつのは、基本的に正篇・続篇に分ける考え方と変るところ

はない。しかし、正篇から続篇へ何故書き継がれたかという問題を考えるに当って、第二部における作風の変化、ひいては作品としての質的な変化ないし深化の問題を抜きにしては、正しい理解を得ることは出来ないと考えられる。

三 何故書き継がれたか

正篇から続篇へ何故書き継がれたかという問題への一応の単純な解答は、物語というものが本来、家の歴史であるという点に求められる。『竹取物語』と『伊勢物語』は『源氏物語』に大きな影響を与えたが、その影響のもつとも基本にあるものは、『竹取物語』も『伊勢物語』も主人公の一代記である点に求められよう。『竹取』と『伊勢』には、物語のいわば理論的範型とでも言うべきものが鮮やかに透けて見えるのである。主人公の一代記とは、連綿と続くべき家の歴史の一齣ということである。家とは、連綿と続き、かつ栄えるべきものだからである。『古事記』『日本書紀』は、天皇家の歴史であるが、それは一代一代の天皇紀のつながりという形をとる。

両者は、物語のルーツそのものであった。作者にそういう認識があつたからこそ、螢の巻の物語論で『日本紀』が引き合いに出されているのである。

『源氏物語』の滯標から少女までの部分は、この物語の中で恐らくもつとも読まれることの少ない部分ではないかと思われるが、この部分は、青春時代のいわば遍歴を了えた光源氏の家（家庭）が着々と整備されて行く過程を書いたもので、そういう目で読むと、興味津々として尽きないものがある。二条の東の院のこと、桂の院のこと、嵯峨野の御堂の造営、そして少女の巻の六条の院落成のクライ

マクスを迎える。少女の巻の前に、朝顔の前斎院との結婚問題に決着がつけられることの意味もよく分る。

匂兵部卿の巻の冒頭に「光かくれたまひにしのち、かの御かげに立ち継ぎたまふべき人、そこらの御末々にありがたかりけり」とある。光源氏の家を継いだのは右大臣夕霧であるが、物語の世界の主人公として、光源氏のあとを継ぐべき人物は、誰か。薫が選ばれたことのいわば妥当性はよく分かる。表向き、光源氏晩年の子、しかも母は正室女三の宮で、その出自も申し分がない。異腹の兄に右大臣夕霧、姉に明石の中宮、匂兵部卿の巻によると光源氏の配慮によって冷泉院の猶子として育ち、元服も院においてとり行われた。物語の世界におけるいわば光源氏の二代目として、申し分のない資格を備えていると言ふべきである。

匂兵部卿、宿木両巻における六条の院への言及、蜻蛉の巻後半の舞台となる六条の院、——第三部における六条の院のいわば重さを考えれば、第三部ないしは続篇が、光源氏の家の歴史として書き継がれたことは納得するに難くないであろう。

四 薫の聖性

薫が続篇の主人公として、続篇の物語世界を支えて行くためには、光源氏が正篇の世界においてそうであったように、物語の主人公であり得るための資格としての聖なる性格を付与される必要があった。彼が生来身体から芳香を放つということが、匂兵部卿の巻に、くどいほどの文飾によって書かれているのはそのためである。対して、匂宮がこれに張り合つて薫物を好むということが、これもくど